

かわら版に移行すると書かれています。正確には、「自治会の回覧」現在は会長が必要に応じ作成。漸次、編集委員によってほぼ定期的に発行される会報に移行する。編集委員は運営委員の選考により会長がこれを委嘱する。編集委員は自治会の役員であることを要しない」と記録されています。実際は、回覧板は回覧板として存続し、かわら版は全戸配布でいくということになりました。

浜名 創刊した2006年は故・猪狩誠也さんが自治会長に就任した年です。猪狩さんは広報論研究の先駆者、日本における広報を草創期から理論的・実践的に主導した人として評価されています。出版社取締役や東京経済大名誉教授を務め、自治会長就任時は日本広報学会副会長を務めていました。「地域新聞」を出そうというアイデアはその以前からあったようですが、猪狩さんが自治会長になって実現したんですね。自治会役員と編集部は関係ない言いながら自動車の両輪のようなものだったといえましょう。

創刊10周年の第60号で山川丈一元会長が「自治会には昔から回覧があった。会長が会員に『お知らせ』を送るためのメディアだが、その内容は時とともに複雑化している。それならば会長任せではなく、みんなで協力して編集発行し、会員以外の地区全世帯へも配布する別のメディアをいうので創られ

たのがかわら版」と述べています。**岡田** やはり、かわら版だけ独立しているのではなく、学園町自治会の活動の精神がじわっと漏れ出てきて、それが紙面に色濃く反映されているということでしょうか。読み直してみても、まちづくりとかかわら版はつながっているというところを改めて感じました。学園町の環境を守ろう、この町のDNAを維持しようという思いが底流にあることが分かります。

そして、その構成や編集方針が創刊当時から一貫してぶれずに継承されていることはよかった驚きです。「防災まちづくり」は創刊号からしばらくの間、毎回シリーズとして連載しているし、地域交流も積極的に取り入れている。「この町この地域をこれからどうしようかを、みんなで考えましょう」と書いていますね。

浜名 猪狩さんは新任の挨拶で、「自治会が力を入れなくてはならないのは防災への備えです」と言っています。その防災の組織作りについて、猪狩さんは創刊号で「お互い顔見知りです。普段から声をかけている間柄であるほうが親身になると思います。遠足や、フリーマーケットなども近所と親しくなるきっかけになるでしょう」と記しています。

防災と平行してかわら版が当初から力を入れたのが、この町の自然保護です。創刊号から「がくえん鳥鳥類棲息図鑑」を連載してい

ます。2008年に「学園町憲章」が策定されましたが、その前からこの町に押し寄せているミミ開発に関する記述や、憲章策定後の関係業者との折衝による「緑の町」の維持努力についての記事が連載されています。

もう一つ、この町にどんな人が住んでいるかを解明するのも大事なテーマです。「へえ、こんなに偉い（あるいは変な）人がいたんだ」という楽しい記事を読ませる。反対に新たに移住してきた人を「先住民」に知らせるのも役目で、「ウエルカム学園町」が定番となりました。ただ、ウエルカム学園町が、新住民と先住民との交

流になっているのかどうか、単に新住民を紹介しているだけに過ぎないのではないだろうか、と自問自答しています。新しい住民の方々が、一緒に活動できるようなことが具現化できたらいいなと常に思っています。

ずっと前に中国から来た人を紹介したことがありました。最近中国人の方々が多く住むようになってきましたが、うまく町に溶け込んでくれるためにかわら版が役に立てばいいと思います。**岡田** 一方通行じゃなくて、双方向のつながりが重要だというわけですね。新聞というのはどうしても一方通行になりがちなので、例

えば、自治会としてホームページを開設することも必要になってくるかもしれません。ホームページは広報だけでなく、いろいろな情報が寄せられるような仕組みにすることもできます。

最近、学園町が、「住まいのまちなみ優秀賞」を受賞し、1月には「学園町誕生100年」の講演会が開催されました。「開発のスピードが早く、学園町憲章に沿っていない開発もある」といった指摘や「今こそ次の世代につなげる『まちづくり』へ道筋をつけて欲しい」という期待の声が寄せられています。今後は、町づくりの活動を「町の中」だけで終わらせる

活マナーに於いては必ずしも徹底しない面もあり、学園町全体のイメージを損ねる恐れがある。この問題を解決するため、2008年5月の第5回定例会で「学園町環境問題提起」が議題となり、環境問題の重要性が認識された。その後、2009年10月の第6回定例会で「学園町環境問題提起」が議題となり、環境問題の重要性が認識された。その後、2009年10月の第6回定例会で「学園町環境問題提起」が議題となり、環境問題の重要性が認識された。

● 52号(2015年4月)
学園町憲章が策定されたのが2008年。その前の2006年の自治会総会での一人の住民の意見が出席者全員の賛同を得て、有志の勉強会が発足し、それが憲章策定へとつながっていききました。策定から7年、いかに憲章が機能し、緑の環境が守られてきたかを伝えています。

学園町自治会新聞

2015年4月10日発行 (1)

発行人/学園町自治会会長・矢野祐南
投稿・連絡先/学園町2丁目13番地30号
電話・FAX/423-0078
全開編集/学園町自治会広報委員会
編集長/浜名 純

52

www.abn.jp

隔週無料・各戸配布/隔月発行

かわら版

学園町憲章 個の意見から 町の理念へ 進化する10年の足跡を辿る

「学園町憲章」は、住民の生活を守るための「約束」です。2008年5月の第5回定例会で「学園町環境問題提起」が議題となり、環境問題の重要性が認識された。その後、2009年10月の第6回定例会で「学園町環境問題提起」が議題となり、環境問題の重要性が認識された。その後、2009年10月の第6回定例会で「学園町環境問題提起」が議題となり、環境問題の重要性が認識された。

のではなく、外部にも積極的に発信していくことが重要になってきました。そういった意味で、現在はまさにルネッサンスの時です。かわら版や自治会の活動の新たなスタートの時ですね。

浜名 それに関連して、今号からかわら版の編集に携わっている専門委員の人が、東久留米市の中央図書館に問い合わせたところ、かわら版が1号から65号まで書庫に保存してあるとのこと驚きました。その際、66号から現在までの分をぜひまた寄贈してほしいと言われたとのことです。

岡田 南部地域センターにあるひ

ばりが丘図書館にも置いてあるんですか？

浜名 置いてないんです。ひばりが丘図書館に地域資料コーナーがあるので、そこに、かわら版をおいてもらうことを検討してもらいたいと思います。それだけでなく、「学園町自治会まちづくり勉強会参考資料コーナー」を作ってもらえたらいいですね。新しい専門委員の人とは、私たちがやるう

岡田 なるほど。いいアイデアで

す。かわら版のデータ化もきちんとしないといけませんね。今、自治会はチャンスの時でもあると思います。環境問題、まちづくり問題、防災問題などいろいろな問題が煮詰まってきた、本当に必要なものを手がけていこうという話になっていきます。そのためには地域の交流が重要です。そして、猛烈な勢いで新しい人たちが入ってきています。かわら版も自治会活動も、次代を担う新たな世代に繋いでいきたいですね。

浜名 そのとおりですね。次の若い世代にうまくバトンタッチしていきたいと思います。

2023年自治会総会を開催

学園町自治会の2023年総会が、5月28日(日)、自由学園しのめ茶寮2階の会議室で開かれました。コロナ感染による規制も緩和されつつあり、会員40名が出席。1丁目の北浦さんが議長に選出され、議事が進行しました。

まず人見良一会長が2022年度の活動の概要を報告。それによると、会員数は2023年3月末で638世帯で前年度と比較して若干の減少となりました。また、毎月第2日曜日にしのめ茶寮前庭で朝市を開催。敬老の日のお祝いとして9月12日に、70歳を迎えた人と77歳以上の人が合せて227名の方にお赤飯を配りまし

た。また、2022年度中に誕生された4名の赤ちゃんのご家庭にお祝いのカタログギフトをお届けしました。亡くなった方は11名でした。その後、「環境保全活動」「安全防災活動」「文化情報活動」「広報活動」「募金活動」「資源集団回収活動」について、各担当者から報告がありました。

次いで、「会計報告」と「監査報告」のあと、2023年度の自治会事業計画と予算案の説明がありました。事業計画では、学園町憲章にうたっているように相互に助け合い、清潔な街並みを維持し、豊かな緑を保全し活力ある町を目指すこと。今年はバス旅行や

バザーを再開したいという方針が示されました。また、人見会長から「2023年度も毎月第1、第3、第5日曜日に資源集団回収を実施するので、協力をお願いします」との発言がありました。

予算案は、収入が自治会費、補助金などで218万円(千円以下切り捨て)で前年より19万円増支出は213万円となっています。

なお、会長の任期は2年で、引き続き人見さんが会長を継続することになりました。

また、総会終了後の午前11時から、40人が参加して「学園町まちづくりワークショップ」が開催されました。内容については次号以降で報告したいと思います。

学園町誕生100年に向けて 大月敏雄先生講演会 「市民にできる『住まいまちづくり』」

学園町が「住まいのまちなみ優秀賞」を受賞したのを機に、4月8日、自由学園しのめ茶寮で学園町自治会主催の大月敏雄・東京大学教授の講演会(勉強会)「市民にできる『住まいまちづくり』」を実施しました。

大月教授は、住まいのまちなみコンクルの審査委員長であり、日本各地のまちづくりの様子を紹介しながら、学園町のまちづくりに対する貴重なアドバイスをしてくれました。

東久留米市の都市計画マスタープランでは、学園町に関して「自由学園とその周辺住宅地にも緑が多く、区画道路も整備された良好な住宅地が形成されています。しかしながら、建築物の更新に伴い、敷地の細分化や緑の減少が進んでおり、その対応が求められています。」

このため、良好な住環境の維持と保全を図るべく、地区計画制度など地域のルールづくりに向けた検討を行います」と謳われています。大月教授は、まず環境保護のための地区計画などについて説明。建築協定、緑地協定といったものもあり、住民発意型と開発時の形態制限型があると話されました。

次いで八王子市めじろ台のまちづくり活動、いわき市や松山市、筑西市の事例についても触れ、「い



るいろんな人がいるなように共存できる」ことが重要であり、それが多様性の獲得につながると述べました。

「行政とのかかわりについては、ケンカ腰ではなく、太陽と北風に例えれば太陽になって付き合うのがよい」「まちづくりに必要スピードが大切だが、それ以上に一歩進むことが重要」とアドバイス。特に「まちづくりに終わりは無い。まちづくりのプロセスを楽しむべし」というまとめの言葉が印象的でした。



042-423-8646

・自由学園トークセミナー
・7月20日（木）20:00～
21:00
形式：YoutubeLive 配信